

## 「近代・イスラームの人類学」、その先へ——大塚和夫先生のめざしたもの」 開催報告

### 【第1部】

本シンポジウムは、「近代・イスラームの人類学」、その先へ——大塚和夫先生のめざしたもの」と題し、2022年10月16日（日）、東京都立大学南大沢キャンパスにてハイフレックス形式で開催された。当初は、2020年3月に開催を予定していたが、コロナ禍の影響で3年越しの開催となった経緯がある。そのような中でも、当日会場には49名、オンラインからは107名の、総勢156名の参加を集めた。この人数だけをみても、大塚先生の人望とご活躍が窺える。

第1部「大塚先生の研究を振り返る」では、人類学者と地域研究者という立場の異なる4名の登壇者（齋藤剛先生、臼杵陽先生、末近浩太先生、小田亮先生（発表順））がそれぞれの視座から大塚先生の／との研究を回想し、それを受けて最後に赤堀雅幸先生が登壇者それぞれの発表に対してコメントを述べ、総括した。すべての発表において、大塚先生のお人柄を感じさせる印象的な「思い出」の数々に話が及び、登壇者や会場全体の活発かつ和やかな雰囲気からも、大塚先生の教育を第一に据えられた実践が結実していることが垣間見えた。なお本シンポジウムは、科研費基盤研究(A)「イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究（代表：長沢栄治先生）」、東京都立大学社会人類学教室、および日本文化人類学会関東地区研究懇談会の共催であることを付記しておく。

最初に、本シンポジウムの主催である「大塚和夫先生の研究を振り返る会」の呼びかけ人を代表して、長沢栄治先生が開会の辞を述べた。開催のきっかけは、大塚先生の奥様である美保子夫人とのメールでのやりとりであった。大塚先生がご逝去されて以降、どのようにそのことを受け止めるべきか迷っていた奥様に対し長沢先生は、若手研究者が大塚先生の研究を確かに引き継いでいることを説明しつつも、ご研究を振り返る会を実施して、より広く大塚先生と面識のない若手研究者にもそのご研究に触れてもらいたいと考えるに至った。そのため本シンポジウムは偲ぶ会ではなく、タイトルにあるとおり、その先に向かって我々が何を引き継ぎ、発展させることができるかを問うことを趣旨とする旨を強調した。

次に、司会の大川真由子先生が、大塚先生のご研究の具体的な軸を二点挙げ、続く登壇者の発表につなげた。一つ目の軸は「人類学」である。大塚先生は常々、認識論的な観点として、異文化理解には二種類あるとおっしゃっていた。すなわち、フィールドでの直接対話による経験的・感覚的な異文化理解と、自文化に戻った後に実践される、母語による書き言葉で客観的かつ論理的な再構成を経て得られるものである。この際、翻訳の適切さは保証されないわけだが、人類学者とフィールドの人々との間主観的な客観性の存在を肯定され、それが暫定的なもので再解釈可能であると、継続的なコミュニケーションに裏付けされたダイナミックな過程こそが文化人類学の異文化理解の特徴であると主張されていた。また、二元論的理解の否定も大塚先生の重要な姿勢である。たとえば、本質主義と構築主義を二者択一的にみなす必要はなく、意識的に使い分けていけばよいとされていた。

方法論の視点からは、経験科学としての人類学の価値を訴えておられた。現在学としての人類学、いわゆる「未開」の人々も現代的な問題に直面している同時代人として認め、時代に合わせて人類学の既成概念を修正していく必要があると掲げられていた。

二つ目の軸は「イスラーム」である。主要なフィールドはエジプトであったが、イスラーム全般の研究を志向されていた。イスラームと近代の関係についてはゲルナーの比較宗教論的アプローチを援用し、文献中心主義であったイスラーム研究と聞き取り調査中心の人類学的研究を架橋したことを特筆すべき実績として紹介した。

続いて登壇者の発表に移る。最初の発表者である、東京都立大学で直接大塚先生の指導を受け、長男的存在の齋藤剛先生は、スーダンでのフィールドワークを基にした『テキストのマフディズム』を取り上げ、大塚先生とフィールドワークとの関係を紹介した。スーダンという特定の地域だけをフィールドワークの対象としたことは、大塚先生の数々のご研究の中でも特別な意味を持っており、その姿勢は灌漑農業と人々との関係をめぐる以下のエピソードに示される。ある講演会で大塚先生が、ディーゼルポンプ導入の事例報告を、視野の広い発表をされるという招待者の予想に反して、民族誌的価値を強調しつつ非常にミクロな話を並々ならぬ熱意を持って展開されたことは、齋藤先生にとっては注目すべきことであった。また、スーダンのフィールドワークでは未だ発表に至っていない大量のデータを蓄積しており、これから時間をかけてまとめていきたいと語っておられたという。『テキストのマフディズム』と並ぶ、断片的に発表されたこれらの論考群は、未完の民族誌の構想を垣間見させてくれるものであり、人々の生活や生存と深く関わる問題に強い関心を持っていたことを我々に知らしめる証左になる。最後に、こういった人々の生活の根幹をなす事象に着目するという姿勢は、近代イスラームを扱う際も同様であったと論を進め、もう一つの未完の民族誌として、土産物店の店主であり友人のイブラーヒーム氏とその家族に関する論考を挙げた。これまで、サダト元大統領の暗殺がイスラーム復興に関心を持つきっかけとされていたが、イブラーヒーム氏の生活自体に関する理解を深めることも一つの動機であったのではないかと推測した。

臼杵陽先生が欠席のため、一ヶ月前の打ち合わせ時の草稿を大川先生が代読した。大塚先生との出会いは、国立民族学博物館に附設された地域研究比較交流センターの共同研究会がきっかけであった。自身が人類学者ではないことを理由に、人類学者としての大塚先生を評価することはできないと前置きした上で、地域研究という観点から、国立民族学博物館で勤務されていた時代に行ったエジプトから北部スーダンのフィールドワークが人類学者としての礎になったと思うと語った。方法論に厳格であり、理論的な観点からの関心が高いこと、一方では、地域研究とその方法論はどのようなものかという結論が出ない疑問に対しても持論を展開されており、地域研究者はそれぞれの方法論を持っているということを示唆されていた。大塚先生がコミック好きであったことに影響を受け、臼杵先生自身もたくさんコミックを収集しており、コミックこそが大塚先生の遺産であると締めくくった。この代読に続いて大川先生より、大塚先生が、「最近では地域研究者もフィールドワークに行っている。人類学者がフィールドワークをしなくなったら、地域研究者に勝てない」とおっしゃっていたことに言及された。人類学たる所以はフィールドワークなのだ、と。

在外研究中のためビデオ出演となったが、末近浩太先生は大塚先生との出会いとその後の師弟関係を語った。ロンドンのかつての本屋街チャリングクロスロードの本屋で、「アンソロポロジー！アンソロポロジー！」と叫んでいる人がいた。人類学の棚を探していた大塚先生であった。それをきっかけに開かれた中華料理店での即席研究会において、戦略的本質主義についてじっくり会話したことがもっとも強く印象に残っていると語った。末近先生自身は人類学者ではなく、中東政治とイスラーム主義、中東地域の近代化に関心があるわけだが、そのような分野の人間が今この場で話していること自体、大塚先生の射程の幅の広さがわかると指摘した。大塚先生はこれらの関心に対して人類学的側面から、「イスラーム“と”近代」ではなく「イスラーム“の”近代」について取り組まれていた。イスラームと西洋、テキストと行為などの二元論を、イスラームの現地の日常の営みから動きのあるものとして捉え直そうとされたことが特筆すべきである。末近先生は、大塚先生の『イスラーム主義とは何か』（岩波新書）に続いて、『イスラーム主義——もう一つの近代を構想する』（同じく岩波新書）を執筆した。人類学者と政治学者がそれぞれ書いたものだが、根底では通じるものがあることを強調した。

最後の登壇者である小田亮先生は、人類学的理論の問題意識が最も表れている書籍『いまを生きる人類学』を取り上げ、大塚先生の人類学の理論的な研究について考えを述べた。小田先生は「大塚さん、人類学に戻ってきてくださいよ」と大塚先生に言い続けていたという。というのも、大塚先生は地域研究という文脈で評価されていたためだ。小田先生は、この本の刊行をもって、「ほら、おれは人類学やってるだろ？」という大塚先生からの回答として受け取ったと語った。

さて、大塚先生は本書で、アラブにおける女性性器切除（FGM）に関し、最近の人類学の傾向に対する違和感を表明された。それは、政治性を自己批判して、弱者の抵抗の側に立たねばならないとする人類学の姿勢に対する違和感である。フィールドにある現実というものは、二元論的整理を拒む、錯綜した複雑なものであるという信条による。そしてこれは、人類学のフィールドワークによってしか把握できないと言っていると思うとし、小田先生も共感を表した。しかし、大塚先生が主張する、FGMなどの議論に見られる善悪の判断基準は、学問に求めるべきではなく、個人が追うべきものであるという見解には疑問を呈する。平和・相互扶助を保持したり再現したりするのに役立つ「抵抗」こそ、「善い抵抗」と言えるとすれば、その基準は個人的な政治判断などではなく、フィールドでの相互扶助の具体化のやり方に学びながら、学問としての人類学こそが明らかにできるものである。この小田先生のカウンターは、今となっては大塚先生と対話できるものではないが、半分以上は同意してくれるだろうと思っていると述べた。このことについて多く議論したことはなかった。「もう一度言いたい、人類学に戻ってきてほしい」という言葉で締めくくられた。

最後に、4名の登壇者の発表に対して赤堀先生がコメントし、ディスカッションへ移った。その中から数件を紹介したい。臼杵先生の地域研究と人類学に関する論においては、地域研究か人類学かという問いはもはや無意味であることを補足し、そしてこのことを、中東民族誌家を自称する大塚先生が考えておられた以上に議論していくべきであるとした。

中東を超えたイスラームを取り扱った地域研究の総合の仕方が大塚先生によって示されたわけだが、それと人類学との関係を議論していくべきことも付け加えた。

小田先生のフィールドと理論に関する論においては、大塚先生はフィールド寄りであるとした上で、しかし同時に理論を見逃さないことを強調した。特筆すべきは、人類学者が人類に対して考えるということに一足飛びに臨むのではなく、イスラームと近代というホームランでもヒットでもない二塁打・三塁打を理論的な焦点にしたことが慎重さの表れであり、理論を組み込むにあたって見事な戦術であると分析した。小田先生は赤堀先生の一連のコメントに対し、地域研究の文脈で大塚先生の人類学の研究が高く評価されることの偉大さにあらためて触れ、人類学の中で「大塚理論」が評価されるかと言われるとそうではないとするが、大塚理論というのは明らかに存在するとし、それを大塚先生が書くつもりであったらと応答した。

あらためてこれまでの議論を総括して赤堀先生が、大塚先生は100年後を見据えることが大事と言うが、「見通す」必要はないと理解できるとし、この姿勢と予言の違いは大きいと強調する。論文などで業績を評価される時代ではあるが、人類学者は学問の中でも珍しく、その姿勢=生き様によって学問を形成している面があるとし、第1部を締めくくった。

終始大塚先生との真摯な対話が繰り返されており、これはひとえに大塚先生の人間性やご指導の賜物であることが容易に推測できた。また、バリバリの理論家と評される一方、それ以上にフィールドに対する熱い思いが強いという報告が大半を占めており、本シンポジウムをとおして、人類学は、たとえ客観性を欠いたとしても経験科学としてそれを超える強みがあり、このまま邁進すべき／してよいと個人的には理解した。もちろん、同時代的な現象を対象とせよというご指導を内省すればその限りではなく、都度どの方向に進めば良いかを考えていく必要があるし、そのこと自体も「人類学をする」ということの実践であるのだと受け取った。

(柿倉圭吾・東京都立大学大学院)

## 【第二部】

第二部「大塚先生から学んだこと」では、7名（谷憲一先生、池田昭光先生、竹村和朗先生、久志本裕子先生、亀井伸孝先生、森山央朗先生、岡真理先生・発表順）が登壇した。まず、司会の飯塚正人先生が自身と大塚先生の間を端的に述べたのち、今回のシンポジウムは若い世代に大塚先生の残したものを伝えることであるとして、最年少の谷憲一先生へと話を繋げた。

谷先生は学部時代からイスラームに関心を抱くも、大学院では社会学に進むべきか、人類学の途を選ぶべきか決断できずにいた。そこでゼミの担当教員の勧められるまま読んだのが『異文化としてのイスラーム』や『イスラーム的』であり、人類学の魅力に惹かれて専攻を決めたのだという。当時大塚先生はすでに亡くなられており、直接会うことは叶わなかったが、それ以降も谷先生の研究には大塚先生の存在が深い関わりを見せた。とりわけ修士論文執筆時にタラル・アサドの難解な議論と格闘していたときは、大塚先生が論文でアサドを引用していたことが励みにもなったという。「大塚先生が自分の状況にいたと

しても同じ問題に取り組んでいたに違いない、と妄想していた」という語りから、谷先生が大塚先生の存在と共に研究の歩みを進めていたことは想像に難くない。

最後に谷先生が大塚先生から学んだこととして言及したのは、日常の些末な出来事に向ける視線である。それ自体は雑多で断片的な事象でも、長期的な視野でそれらを結び合わせて探究してゆくことで、何らかの事実が浮かび上がる。そうした姿勢こそが人類学者としての大塚先生の生き方なのではないかと述べ、話を締めくくった。

つづいて、学生時代大塚先生から直接の指導を受けたとして紹介されたのが、池田昭光先生、竹村和朗先生、久志本裕子先生の3名である。

池田先生が引用したのは、大塚先生の著書『異文化としてのイスラーム』にある、付き合いのあった原理主義「シンパ」医大生にあご髭を剃るよう薦められる場面である。普段は語る主体にいる大塚先生が、ここでは一転エジプトの人から話しかけられている。またこの記述はこれ以上掘り下げる余地がなく、行き詰まりを見せている。こうした点が、段階的確に議論を展開する大塚先生像とのギャップがあり、珍しいのだという。

大塚先生は、生前この場面について次のように語っていた。曰く、これは日本の新左翼の登場を考えながら書いたのだという。この発言を受け、池田先生は、大塚先生が見据えていたのはイスラーム圏に留まらない「同時代」の類似性なのではないかと推論を述べた。「同時代」の問題に触れたことで大塚先生の言葉は途絶え、論述は行き詰まりを見せた。それゆえ世間の反応はなく、以降議論が展開されることもなかった。しかし、だからこそ大塚先生の取り上げようとしたこの問題は、ある種の議論の「場」として、先生のたまたまいととも書物に保存され得たのではないか。このような解釈を提示し、池田先生の発表は幕を閉じた。

竹村先生は、高校時代から中東・イスラームへに関心があり、雑誌で大塚先生が紹介されているのを見て都立大への入学を志したという。その後、修士の頃にはエジプトのAUCへと留学した。当時自身の研究について「おまえさんが何をやりたいのか、俺にはまだ分からん」と大塚先生に言われ、悔しさを覚えつつ、一方ではその言葉を受け止めてこれまであらゆるテーマで研究を行ってきたのだという。

竹村先生が題材として提示したのは、大塚先生の著作『近代・イスラームの人類学』だ。これを読み、「ムスリム」という枠組みが果たして適当なのか竹村先生は疑問を抱いたという。大塚先生自身もこの問題は意識していたようで、文中には、「ある種の本質主義的な語り方をしなければ、議論を展開できないのでは」として当該枠組みを採用する旨が記述されている。

竹村先生の論点は、「ある種の本質主義的な」枠組みを用いない道筋の探究である。これに対する正解は未だ出ていない。しかし、学問的な立ち位置を常に自省し、大塚先生の残したこの「宿題」を考え続けなければならないとして話を締めくくった。

久志本裕子先生は、博士課程への進学を考えていたときに読んだ『近代・イスラームの人類学』が大塚先生を知る契機だったという。いたく感銘を受けた久志本先生は大塚先生への師事を決意し、研究会に参加するなどして教えを乞うていた。

そんな久志本先生が今後研究したいのが、大塚先生の著作の題にもなっている「イスラーム的」という概念だという。久志本先生は、博士課程のときから現代マレーシアのムスリムが語る「イスラーム的」なものに焦点を当て、そこへ半ば無意識の近代性・世俗性が含まれていることを指摘してきた。他者への排他性すら含む「イスラーム的」概念をめぐり、学术界では対立が深まりつつあるのが現状だ。

こうした問題について大塚先生が取った態度は、誰が良い・悪いという議論に拘泥せず、「イスラーム的」が指すものの多様性や複雑さをさしあたり受け止めることである。久志本先生も人類学者としてのこうした姿勢を受け継ぎ、問題の背景にある社会構造を解き明かしていきたいという意志を明らかにした。

次の登壇者である亀井伸孝先生は、大塚先生が AA 研の所長を務めていた時期に研究員として在籍していた。亀井先生が語るのは、上司としての大塚先生の姿である。

2006年に科研費での「資源人類学」若手ワークショップで発表した亀井先生は、それを契機に知識資源班へと参入する。そこで大塚先生と出会い、交流が始まったという。翌年には、2008年開催予定の「フランス語圏アフリカ手話」言語研修の講師としての任命を受け、またほぼ同時期に AA 研の非常勤研究員としても採用された。

大塚先生は、所長としての配慮を欠かさない人物であったという。「君はずぬけてワーカホリックだぞ。ムリすんなよ、ムリは」という気遣い。書類捌きに忙殺される自身を指し、「こんなになっちゃったら、終わりだぞおー。若いうちに、ちゃんと仕事しとけよー」と冗談めかして言う姿。「早く2冊目の本を出しなさい」との励まし。このような言葉の数々が胸に残っていると亀井先生は話した。また、大塚先生とは家の方向が同じであり、さまざまなお話を聞いた帰路の車中も貴重な時間であったという。こうした思い出を生涯忘れずに大事にしたいとし、亀井先生は話を締めくくった。

残る登壇者の森山央朗先生、岡真理先生は、人類学以外の分野に専門を持つ二名である。

森山先生が大塚先生に初めて会ったのは、学部時代に史学科の院生室でアラビア語の勉強をしていたときのことだ。他の教員を探して隣の研究室からふらりと現れた大塚先生は、森山先生の手元を一瞥し「君、アラビア語を読むんだ」と呟いてその場を去った。当時の森山先生は大塚先生のことをよく知らなかったが、その後イスラーム関係の歴史を学ぶに従い、大塚先生のゼミや研究会に顔を出すようになった。当時、史学科で厳しい指導を受けて心が折れそうになるたび、大塚先生のゼミ等で悩みを吐露して、励ましを受けていたという。

大塚先生から学んだこととして森山先生が第一に挙げたのが、自身の学問分野への強いこだわりである。そうして自分野の「足腰」を鍛えてこそ学際研究においても有意義な成果が出せるとして、大塚先生の教えが現在も自らの指針になっていることを強調した。

森山先生にとって大塚先生は「斜め上」の、「隣の優しいおじさん」的な存在であったが、一方で自身がこれまでやってこれたのは大塚先生のおかげでもあるとして、森山先生の発表は幕を閉じた。

岡先生が初めて大塚先生と会ったのは、1982年、エジプト留学の初日であった。現地の男子大学生に誘われて大塚先生に相まみえ、そのまま彼の提案でフセインへ行くことになった。タクシーを止めようと「セードナホセイン！」と必死に叫び続ける大塚先生の後ろ姿をやたら鮮明に覚えていると、岡先生は笑顔で語った。

数年後、岡先生はモロッコの日本大使館で専門調査員を務めることとなり、その期間中に大塚先生もモロッコを訪れる機会があった。日本からえび満月と歌舞伎揚げのどちらかを買ってきて欲しいと岡先生が頼むと、大塚先生は両方を持ってきてくれて、歌舞伎揚げに関しては2袋も持参していた。その姿に、「愛の人だな」「人間を愛しておられる方なんだな」と感じたという。

さらにその後、岡先生は東京都立大学で教鞭をとっていた。その頃ある公募への推薦文を指導教員に断られた岡先生は、話を聞いてほしい一心で、突然大塚先生の研究室を訪問したという。大塚先生は科研の申請書を作成していたにも関わらず暖かく迎え入れ、「真理ちゃんはフィールドをやってるか？」「テキストが君のフィールドだ」と励ましてくれたという。

人間を愛し、共感を持って他者に接する大塚先生。彼から学んだのは、そうした人間として、また教員としてのあるべき姿勢だとして、岡先生は話を締めくくった。

続いて、大塚先生の奥様である大塚美保子夫人が本シンポジウム開催への感謝を述べ、「(本シンポジウムのタイトルにちなんで)『その先へ』なのだからあなたが話しなさい」と、ご子息の悠也氏へ話を繋いだ。ここで語られたのが、息子の目を通してみた大塚先生の姿である。幼いころ、自身が漫画を読んでいると、父が「勸善懲悪って知ってるか」と二項対立の話を持ちかけてきたこと。「勉強ばかりするなよ」と繰り返し注意されたこと。そうした父親としての言動を大きくなった今思い返すと、人間の多様さを受け止めようとする人類学者としての姿勢に通底したものを感じるのだという。大塚先生は、物事を単純に捉えずに「複雑さに耐える」人だったと、ご子息は回顧した。そうした姿勢は今も自身の糧になっているのだとして、話を締めくくった。

最後に、東京都立大学社会人類学教室を代表して、綾部真雄先生が閉会の辞を述べた。

大塚先生はスーパーマンのような人だと綾部先生は話した。スーパーマンは地球を破壊するほどの力を持ちながら、一方では純朴な好青年としての一面も持ち合わせている。大塚先生も、鋭い論客であり熱心な指導者でありながら、一方では非常に繊細な人物なのだという。指導学生が引きこもってしまったときなどはその事実を重く受け止め、「俺、間違ってたかな。いや、間違ってたかな」と綾部先生に相談したこともあった。明朗で分け隔てなく学生と接する一方、そうしたことを極めて繊細に受け止める、奥行きのある人物なのだと言った。そんな大塚先生の残した言葉を真摯に受け止めて発展・継承しつつ、100年先を見据えて人類学をしていく必要があるのではないかと述べて、閉会の辞を締めくくった。

今回何より印象深かったのは、大塚先生が周囲の人から大きな敬愛の念を向けられており、また先生自身も人々に愛情深く接していたということだ。そうした愛情深さや他人への共感性の高さは、一方で指導者としての正解に悩むような繊細さと表裏一体かもしれない

い。しかしながらその繊細さこそが、着実な議論の展開や言葉選びの慎重さに繋がり、鋭い論客としての大塚和夫を形成していたに違いない、と想像を膨らませた。本シンポジウムの目的は、大塚先生を知らない若い世代に彼の残したものを継承していくことだという。私自身もその「若い世代」に該当する一人であるが、大塚先生を慕う他の先生方のお話を伺い、不思議と大塚先生に会ったことのあるような、彼の持つ雰囲気になぞかながら触れられたような気がした。人間の多様な姿を温かい眼差しで見つめてフィールドの些末な事象を拾い上げてゆく、そうした大塚先生の姿勢を見習い、研究の道のりを歩んでいきたいと強く感じられるシンポジウムであった。

(田村あすか・東京都立大学大学院)